# 不誠実な小心者

鈴木　みい

「愛なんてないから喧嘩なんかしないの！」助手席の真知子が横目でチラッと僕をみながら言った。そうか、僕たちには、やはり「愛」はないのか・・・・。

真知子が、僕の勤務する中学に転勤してきたのは４年前。僕と同じ年の42歳と聞き、正直驚いた。年齢よりも若々しく見え、ハツラツとした印象を抱いた。他の同じ年の女性と比べたらまだまだ「女」として生きている感じがしたし、真知子自身も自分の着ている洋服や、髪型に気を使っているのが伺えた。この人とどうかなりたいとかじゃなく、色気のない職場で真知子の存在は僕にとって、刺激的だったことは事実だ。

## 1

僕は、大学卒業後すぐに中学の英語教師になった。何度か恋愛もしたし、そこそこ楽しい青春時代を過ごせたと思っている。28歳の時母がガンで他界したことを除いては悲しくなるような不幸はなかった。かなり世間では遅いと思われるかもしれないが　三八歳の時一〇歳年下で小学校の教師をしている美帆と大恋愛でもないが、彼女の真面目さに惹かれ結婚した。美帆は一人娘であったため、彼女の両親は僕が長男であることと、生理的に僕の事が気に入らなかったのだと思うが、ともかく快く賛成してくれなかった。そのせいか結婚にいたるまで途中決断が鈍ったこともあつたが、彼女の実家近くに住むことで、彼女の両親も納得し結婚できた。僕には、妹が一人いるがとっくに嫁いでいたから、母が亡くなった後僕の父は一人で暮らしていた。父は「おまえがいいなら・・一人でも大丈夫だよ」ということで、長男であるにもかかわらず妻の実家近くに住むことにした。年老いた父を車で２時間離れたところにおいておくことは、心もとなかったため、僕は１週間に１度父を訪ね実家で泊まっている。

実は僕たち夫婦の間には子どもがいない。いや、できないのだ。４年前に夫婦二人揃って病院で診てもらった結果、原因は僕の方にあった。僕たちはもちろん大きなショックを受けた。美帆は一人っ子で兄弟姉妹がいない。彼女の両親ももちろん孫の誕

生を待ち望んでいるにちがいない。かねてから、僕のことを快く思ってない両親は僕が原因で子どもができないと知ったら、逆上しますます関係は悪くなるにちがいない。僕は美帆の大切な将来を思い、離婚を提案した。相手が僕でなはなく別の男性と結婚したら、美帆はわが子を宿すことが可能なわけだ。しかし、美帆は涙を流し「子どもがいなくてもあなたと生きていく」と宣言した。そして、この事は二人の生涯の秘密となった。僕はいってみれば欠陥品の僕のことをそんなにまで言ってくれる美帆にできる限り尽くさないといけないと思っている。そう罰があたる。美帆と僕はそんな深い事情のある夫婦なのだ。

2

僕は父の影響で子どものころから登山が趣味だった。今でも月に 1 度は父親を連れあちこちの山に登る。僕にしてみれば唯一の親孝行なのである。妻美帆は登山を好まない。新婚当時何度か誘ったがどうもあわないらしい。親父と行く以外にも友達と出かける時があるが、美帆は留守番している。なぜか美帆には友達がいない。もともと口数の少ない美帆は地味でこれといった趣味のない静かな性格なのである。よく言えばおとなしい、悪くいえば暗い。しかし、美帆のおとなしさや、10 歳若くても年齢差を感じさせない古風なところが気に入って僕からプロポーズしたのだった。僕は気の弱い、小心な男なので、気の強い女性は避けたかった。少々元気がなくてもおとなしく賢い、そして男として安心できる女性を選んだつもりだった。僕にとっての安心は男性経験が少なくよく言う「すれてない」女性を第一条件にしたつもりだった。美帆はその第一条件を満たすべく僕と結婚する２８歳まで性的経験はなかった。家事が苦手で、食事の用意はほとんど料理好きの僕がする。また掃除もさほど得意でもない。おとなしく気は優しいが、まるで家庭的ではない。かといって、バリバリ働くキャリアウーマンでもない。おしゃれにも感心はなく化粧は一切しないし美容院にもめったにいかない。したがって無駄遣いのほとんどない美帆の預貯金額は僕のものとは、一桁ちがうのである。

真知子が職場の誰かに僕の趣味が登山だと聞き近づいてきた。

「鈴木先生、山登りされるんですか？実は私 2 年前から低い山に登っているのだけれど、よかったら、今度一緒に連れて行ってもらってもいい？」

「へぇー、そうなんだ。行こう、行こう。月に 2 回は行きたいなと思っているんですよ。また、声かけさせてもらいますよ。」

僕は驚いた。ぱっと見た感じ、山登りなどどこから見ても縁がなさそうな真知子だった。この年でミニスカートをはきこなす少々派手で、おしゃれな真知子と山のぼりがどうしても結びつかないのである。

そんな山行きの話をして 1 ヶ月後、僕は同僚の小沢氏と真知子の両方に山行きの話をもちかけた。2 人とも都合よく予定があいていたので、週末に登ることにした。ところが、当日の朝になり小沢氏は急用ができ、断りの電話が入ったのである。そして、天気も今ひとつぱっとしなかった。僕はだんだん行く気がうせはじめ、真知子に電話し「本日は中止に・・」と言うつもりだった。

「もしもし・・」

「はーい。おはようございます。今日はよろしくね。今出発しますからね。」真知子はやたら元気で明るく、はきはきと喋ってきた。

「あのさあ、そっちは天気どう?」

「えっ?どうって行かないの?私もうお弁当作りましたよ!行こう、行こう!」

一方的にまくしたてる真知子に僕は一瞬困惑したが、意外にもあっさりと

「そうだね、そうしょうか。」

と僕の口から出たのである。

待ち合わせ場所のドライブインに行くと真知子はピンクのチェックのブラウスに黒いスラックス姿で来ていた。真知子は手を振りながら、

「おはようございます。ここ、ここ」

と僕を招いた。年甲斐もなくはしゃぐ真知子がかわいく思えた。登山口まで 1 時間のドライブだ。車中僕たちははじめて個人的に紹介しあった。真知子には離婚暦があること、大学生、高校生の娘 2 人がいるが元夫と暮らしていて、現在はマンションで一人暮らしをしているらしかった。酒が好きなことを聞きながら、僕は真知子にはたくさんの男性がいるのだろうなーと考えた。僕もそれなりに妻との生活を話した。しかし、先日の検査で僕たち夫婦には一生子どもができないという話はしなかった。

山頂までの登り道、真知子は無口だった。大丈夫?ときくと、大丈夫よ。とだけ答えた。山頂に着くと展望の良さに真知子は感激し、何度も何度もいいよねー、いい山だよねーを連発するのだった。そして、真知子が早起きして作ったというお弁当を食べた。実においしいお弁当だった。天むすがかなりいけた。真知子のセンスのよさがうかがえた。下山している途中、僕たちは雨に降られたが、山菜を採りながら結構楽

しんでいた。真知子は急に

「あのね、朝会ったあのドライブインでおしるこを食べよう！」と半ば強制的に言い放った。なんてはっきりものを言う奴なんだ・・・と思ったが真知子のそんなところが嫌いでない自分に少しずつ気づいていた。帰りのドライブはあっという間だった。不思議だ。まるで山の魔法にかかったように、着実に僕たちは近づいた気がした。そして朝会った集合場所のドライブインで真知子の希望どおり、おしるこを食べた。というより真知子にご馳走になったのである。ドライブインを出ると雨は本降りになっていた。真知子の車のところまで傘をさしかけて相合傘で送った。雨にぬれるのを防ぐためか真知子は僕の腕をぎゅっとつかみ、体を寄せ付けてきた。こういう仕草もなかばずうずうしいはずが、真知子にしてみれば自然体なのかもしれない。

久しぶりに不思議な感覚にみまわれた。妻意外の女性を助手席に乗せたなーなどとわけのわからないことを考ながら帰った僕は帰宅後、美帆に小沢氏と３人で登ったと嘘をついた。

３

その後も僕と真知子は１ヶ月か２ヶ月に１度山に登った。仕事の話が３割で７割は山を含む趣味の話や近況報告をしあうのだった。なぜか僕は、小沢氏を誘わなくなっていた。近況報告の中で真知子の男関係がちらつき僕はいろいろ想像したが真知子の私生活に立ち入ってはいけないと気をつけた。いや、それをすることは、僕自身が迷宮入りしてしまう気がしたのだ。

僕はかねてから病気や自分の体について母が若くしてガンで他界したこともあって極めて神経質だった。真知子にも自分のからだの心配事をよく話した。その都度彼女は真剣に聞いてくれたし、相談にのってくれた。ふと、家では美帆に甘えられない分真知子に甘えている自分に気づいた。真知子も会えば会うほど僕に愛着を覚えたようにみえた。時々用もないのに真知子は僕の携帯電話に電話をよこし、道で迷ったに始まり、職場でのストレス、夕焼けが綺麗だからみてみろ、虹がかかっているよ・・・など内容は様々だが、４０を過ぎた大人とは思えないほど他愛もない話をするのだった。

夏、真知子から北アルプスに一緒に登らないかと誘われた。泊を伴うそのような登山に行ける訳がない。大胆な真知子に驚いたが、僕は「ちょっと無理。」とだけ答えた。すると真知子はこれまたあっさり、「あっ、そう。じゃあ、一人で行くわ。」と嫌

味なく答えた。真知子が始めて本格的な山登りに挑戦するということで事前の準備に僕は協力した。何度も買い物も付き合い、相談にものった。真知子と一緒に行動していると覇気があった。そして真知子は見事、ひとり登りそして帰還してきたのである。そのことは真知子にとっても大きな自信につながったらしかった。僕はここのところ、本格的な山は遠ざかっていた。結婚してからはほとんど登っていない。親父と行く温泉付の山は山頂近くまで車でいけるものだった。そんなわけでほんの少し真知子にリードされたような気持ちになった事と、もう真知子は山行きについて僕がいなくても大丈夫な気がして寂しくなった。真知子が北アルプスに出かけている3泊4日の間僕は妻美帆と北海道にでかけた。真知子の事が頭からはなれず、早く戻りたい心境になった。最終日、フェリーに乗って一人になった瞬間があった。真知子はもう下山しているはずだ・・・・。僕の頭には真知子の3泊4日の行程がばっちりはいっていた。真知子の携帯に電話をしたが、電波事情が悪くつながらなかった。なぜこんなにいらつくのか、無事に下山したに決まっている。しかし心ここにあらずとはこのことだ。

3日後、真知子から電話がかかった。友達と飲んで今から電車で帰ると話す真知子は陽気でほんの少し酔っていたのがわかった。とたんに会いたくなった僕は発作的に言ってしまった。

「駅まで迎えに行ってやるから西口のタクシー乗り場周辺で待っていて」

「いいよ。そんなー。私からそっちまで電車で向かうよ。」

それだけ言うと真知子は電話をきった。僕は自分が住んでいる家の近くの駅に真知子がわざわざやってくることに戸惑ったが、しばらくすると真知子が駅の階段を駆け下りてきた。黒いTシャツの襟ぐりは広くあいていた。下は白いミニスカートで暗いこともあって後ろから見たらまるで20代のように見えた。

「今度は家まで車で送るよ、さぁ、乗って」

「いいよ。また時間かけて戻ることないから。友だちの家に送って。今夜は彼女の家に泊めてもらうってもうさっき電話で連絡とったし・・・」

「すごいなー、まるで遊牧民族のようだね・・・」

「まっ、そんなところですね。」

わずか10分たらずの間、真知子は北アルプスの話を始終話した。

僕は真知子の案内するまま彼女の友達の家まで送った。なんと僕の家のすぐちかく同じ町内に真知子の友達の独身女性が一戸建てを構え住んでいたのだ。真知子が「あり

がとう。」とだけ残し去った僕の車の助手席には真知子の香りが残った。真知子のシャンプーの香りなのか真知子が車から去った後僕はいつもこの香りを感じている。それにしても真知子の行動力とバイタリティには正直まいる。独身の特権なのかもしれないが、そればかりではないと僕は思っている。自由、きままに生きているようにも見えるが、本当のところはどうなんだろう。僕は深夜までやっているビデオショップに立ち寄り、美帆の待つ家に戻った。

真知子に会って、5ヶ月が経過した頃、僕は真知子のマンションに始めてあがった。二人で山に出かけた帰り真知子に進められお茶をのんだ。マンションはこぎれいに整理整頓されていた。キッチンの流し台横に小さな灰皿を見つけた。男だ、真知子にはやはりこのマンションに通ってくる男がいるにちがいない。僕は確信した。それにしてもどんな男なんだろうか・・・？真知子は駐車場まで送ってくれた。車の中で、僕は何気にショックを受けている自分に腹がたった。と同時に真知子ほどの可愛げのする女が一人でいるわけがないじゃないかと思った。

僕はこんな時代でも、不倫だとか離婚だとかいったことはなかなか認められない頭の固い封建的な人間だ。世間体を気にする気の小さな男なのだ。したがって、真知子と二人で山に登っていることを人に知られたら大変な事になる。ただ山に登るだけの関係だとしても人に妙な噂でも立てられたらそれこそ教師生命さえ危なくなると思った。真知子と一緒にいると楽しいのは確かだが、深入りしたら大変な事態になることぐらい誰よりもわかっている。そして、真知子には男がいるのだ・・・。迷宮入りし始めた僕は自分自身にもどかしさを感じた。

僕に比べ真知子は毎日マイペースだったように思う。仕事は楽しそうに働きいわゆるやり手のキャリアウーマンを感じさせた。かといって、仕事だけではなくプライベートも充実していたにちがいない。真知子が張り切れば張り切るほど僕はエネルギーを吸い取られていく気になり、もう真知子と山にいくこともやめようかと思い始めた。

## 4

美しい紅葉をみがてらの信州の山行きを計画し、僕はこれを最後に真知子との山行きをやめようと決めた。真知子のことが僕の中でストレスになってきていたからだ。厳密にいえば真知子に翻弄している自分に疲れたかもしれない。

その日も真知子は元気だった。朝からべらべらとよく喋った。なんでこれほど話題が豊富なのかと思うほど真知子の感性にも感心した。美帆との地味な生活を思うとある

意味新鮮だった。しかし、今日を最後にもう山にいくのはよそうってどうやって伝えようか考えながら真知子の話を半分上の空で聞いていた。ところが、話はすごい話になっていた。

真知子の夢の話が・・・・。

彼女は先日僕が送っていって泊まった友達の家で、その晩みた夢の話をしだした。夢の中で、僕の家に泊まったらしく僕の家の座敷に来客用のふとんで寝た。朝、目が覚めると真知子は全裸でふとんから出られない。そして、大声で僕を呼ぶ。

「出ようにも出られないよ。下着を買ってきて！」僕は慌てて、家の近くのショッピングセンターに買いに行く。僕が買った下着、ショーツとブラジャーはなんと葡萄色をしていたとのこと。真知子はふとんの中でその下着をつけたらしい。そこに妻美帆がやってきて、真知子に挨拶をする。

「主人がいつもお世話になりまして・・・」とその時、美帆の口元をみてびっくり、美帆は金の金具で上下とも歯の矯正をしていて、ピカピカ光っていたらしい。葡萄色の下着を着けた真知子と金の矯正具を着けた美帆・・・・。夢判断するならいったいどんな意味があるのだろう？すごい話ではないか・・・。真知子はかなり興奮して声だかに僕に話した。僕も大笑いしたが、話している真知子もまた涙を流して大笑いしていた。

紅葉を見ながら、秋の深まりをぼくたちは感じた。帰り道日帰り温泉を見つけ立ち寄った。

「混浴なら、一緒に入ってもいいのに！」

真知子は混浴ではないことを知ってか、知らずかふざけてみせた。僕の中のすけべ心が、『混浴だったらいいのに・・・』と一瞬思った。今回で最後にしようと決めてきたはずだったが、帰るまでに真知子に本当に伝えられるのだろうか・・・。またしてもそんなことを迷いながら、露天風呂に入った僕は思いきりやぶ蚊に刺された。思ったより蚊に刺された範囲は広く、帰り道薬局によりかゆみ止めを買った。僕は真知子に頼んで、背中に薬を塗ってもらった。真知子は左手で僕のシャツをめくり上げ右手指でていねいにつけてくれた。真知子の手が綺麗なことをいつも運転席からみて僕は知っていた。あの綺麗な白い長い指が僕の背中を這っていると思うと、恥ずかしい話、僕は思わず下半身が興奮するのがわかった。

帰りの車から見えた夕焼けがかなりきれいだった。車中、真知子は振り返り、振り

返り夕焼けを見て

「絵はがきチックねぇー」と僕に言った。自然を愛する感性の豊かさが真知子には備わっていた。見た目派手な真知子が山登りすることに最初驚いたが、真知子は見た目とは違う本質があった。真知子は急に何かを思い出しているかのように少し無口になったので、

「何思い出しているの？」

と聞いてしまった。

「ヒミツ・・・」と真知子は少し悲しげな顔をして言った。僕はほんの少し悪い事を聞いたかなと思ったが、これは男の事にちがいないと直感した。僕はまた、ともかく帰るまでに今日は最後にするという話をしないといけないと思い始め、最後になるかもしれないのだ。ここは一つ、自分の心にひっかかっている真知子への疑問を問いただしてみたくなった。

「好きな人いるの？」

「聞きたいの？」

「うん」

「聞いてどうすんの？」

「別にどうもしないけど」

「なんだ、ただ聞きたいだけかー。まぁ、連れてきてもらっているし仕方ないか、教えてあげましょう。実はいたけど・・・今はどうなのかな？相手がどう思っているかわからないし・・・」

真知子が僕の顔を意味ありげにみながらそう言った。真知子はこの僕の事をいっているのだとわかった。とたんに僕は真知子が愛おしくなった。だめだ、今日は言えそうもない、『最後にしよう』だなんて言えない。僕の緊張がとたんに切れると、真知子の以前にあったというその恋愛について興味をもった。きっと僕の顔にそう描いてあったにちがいない。真知子には 1 年前まで同棲していた男性がいた。一度は家庭を捨て真知子のところにきたらしかったが、彼のギャンブルがもとで真知子との愛は破綻し、真知子も借金を請負い、男は妻子のもとに帰ったということだ。真知子にしてみればかなり傷ついたにちがいない。がしかし、僕自身にも過去に女に騙された経験が一度だけある。真知子ほど多額ではないが、お金も持っていかれたがまだ、教師になりたての若いころの話だ。僕はその話を真知子にした。真知子はしつこく聞くでも

なくただ、薄笑みを浮かべながら聞いていた。まるで、その顔は「もう、過ぎたことだから・・・」と言っているようだった。その後めずらしく二人は黙った。あと 40 分も車を走らせれば、真知子はこの車から降り、自分の車に乗り換え帰って行くのだと思うと、僕は妙に寂しくなった。それはまるで若い頃の恋愛のような切ない気持ちだった。気の小さい僕のはずだが我慢できなくなり、大きいため息をついた後、真知子に言ってしまった。

「しばらく走ると、ホテルがあるんだ。入ってもいい？」

「えっ？」

真知子は驚いていたが、20 秒程経過しただろうか、小さくうなずいた。僕たちは一線を越えてしまった。もう、今日限りと決めた山行きのはずがとんだことになった。それどころか、僕は真知子とのセックスに感激した。理屈、道理、道徳・・・そんな堅苦しいもの一切が僕の体からぬけてしまったのだ。真知子は 2 人の子どもを出産したとは思えないほど美しい体をしていた。肌は透きとおるように白く柔らかかった。遠慮なしに積極的でセックスに対する彼女の姿勢が伺えたと、同時に僕は真知子の今までの男性経験を思わずにはいられなかった。そして真知子と暮らしたという見たこともない男に珍しく嫉妬した。もう、後戻りできない。しかし小心な僕は、抜け目なく

「いいかい、この事は棺おけまで持っていくんだよ」

と真知子に言うと、

「この事？この関係の事？山に行ったこと？」

「どちらも・・・」

さすがの真知子もちょっとした放心状態で無口だった。僕は真知子に太い釘をさしたつもりだった。しかし帰り際、僕はまたマンションを訪ねていってもいいかなどと聞いてしまった。

5

その後僕たちは約 2 ヶ月の間、真知子のマンションで会った。だめだ、だめだと思いつつ僕は吸い込まれるように真知子を抱いた。かねてから夫婦の性生活がうまくいってなかったことも手伝い真知子との関係にはまった。美帆は僕が子どもが出来ない体とわかってからなおさら拒否するのだろうかと悩んだがそのことは僕から口にすることはできなかった。しかし、そのような一切の環境、条件を除いても僕は真知子

のからだに惹かれていったことは事実だ。が、時として小心で生真面目？な僕が僕自身を戒めた。こんな女に振り回されたら大変なことになる、何もかもなくすかもしれない・・・。仕事、家庭、社会的信用・・・どうするんだ。そんなことも考え出した。その年の暮れの忘年会の晩、僕たちは駅まで一緒に帰ることを約束していた。一緒に帰って真知子のマンションに行く予定をたてたのだった。しかし、宴会で他の同僚と楽しくのんで騒いでいる真知子をじっと見ているうちに今ならなんとかなる。真知子との個人的な付き合いをやめ、真っ当に生きなければ。第一美帆に不誠実じゃないか・・・。それに僕自身こんな不誠実のままいきていいのか。だめなものは、だめなんだ。もうやめよう。そう、今夜しかない、真知子が多少怒ろうが僕は真知子を無視して一人帰ろう。これをきっかけに真知子との関係を絶ち切った方がいいのだと発作的に思ったのである。そして約束の場所に行かず僕は一人帰った。真知子はどうするのか・・・怒るだろう、しかし、この日を逃すとまた僕の決心が鈍ることは僕自身が一番知っていた。

真知子から電話がかかったのは、深夜 12 時をまわった頃だった。真知子は酒に酔い泣きながら僕を責めた。僕は小沢氏につかまり仕方なく一緒に帰ることになったと真知子に嘘をついたが、真知子は酔いすぎてたぶんそんなことなど聞いてなかったと思う。真知子はずいぶん長い時間僕を待ったらしかった。かなりの後悔とほんの少しのうぬぼれた感情が僕にわきおこった。

真知子はそれ以来、たったの一度も自分から僕に電話することがなくなった。そう、今も。年があけ、僕は真知子の事が気になりついに山だけだったら、と思い自分から電話したが、電源はきられていた。何かに取り付かれたように僕は何度も電話した。8 回目までは覚えている。20 回以上の電話でやっとつながったかと思うと、電話口から男性の声が聞こえた。真知子の男だ・・・。真知子は僕に淡々と話していたがなぜかあの忘年会の晩のことなど微塵もふれなかった。今月末、山に行こうかと誘うと、「今月は無理！」とあっさり言われた。2 度と行かないと言っているのではないということはわかったが、僕は寂しかった。真知子に惹かれた自分、真知子に振り回されたらどうしようとビビッタ自分、別れを決断した自分どれもみな同じ僕なのだ。僕の心は複雑で揺れていた。

## 6

翌月 2 月真知子を山に誘うと、喜んでついてきてくれた。山はチョコレートケー

キに粉砂糖がかかっているみたいと雪が降った後の山に真知子は感激した。しかし以前とは少しちがった。あの忘年会の夜以来、真知子はもう僕のことを愛していないのかもしれない。そんな話題をするのはやめようと思った。真知子には男がいるのだ。その事を証明するかのように一緒にいても真知子の携帯電話はよくなった。決まって男からだった。居酒屋仲間と言ってみたり、ともだちといってみたり。いったい真知子はどんな暮らしをしているのか・・・。登りながら僕は何度も同じことを考えそして自分に言い聞かせた、「しっかりしないと・・・」。

その次の山行きで僕は美帆との夫婦の秘密を真知子に明かした。「涙を流して僕と生きる」といった美保を僕は捨てられないのだと言い、そしてそのことは、実際に口には出さないがまるで真知子に「だから君と生きていけない。」と言っているようなものであり、真知子が以前暮らした例の彼のように妻をすてることなど「ありえないんだよ、」と説得しているかのようだった。なぜこの話しを真知子にする気になったのか。僕をあきらめてくれといって言うのではない。真知子はもうとっくに僕のことをあきらめていたはずだ。ここまでこの深い事情を話して、そして彼女から冷静に身を引いてもらうことを願ったのだ。自分からは別れよう、もう会うのはよそうなどと言えないがために。ところが、話は僕の思ったとおりすすまなかった。なんと真知子は僕の告白を聞き驚いていたが僕たち夫婦の関係について「すごい絆で結ばれたいい夫婦」だと表現し、美帆には友達がほとんどいないことを言うと「なるほどー、夫であり、友達であり、兄であるわけだね・・・」真知子はまるでカウンセラーのように得意げに僕たち夫婦の関係を分析をした。つまり話しの矛先が僕の期待した方向には向かなかったのである。しかし、真知子はうまく言ったものだ。たしかに美帆は僕に何役も求めているかもしれない。おとなしく無口の美帆は悪気はないが僕の中で重荷になってきている。子どもができないというこの事実を人質に僕は妻美帆から離れられないのだろうか・・・。告白のお返しに真知子はほんの少し正直になり「大丈夫、何も求めないから。私たちは山と体だけでつながっているだけよ。それに避妊の心配もないし・・・」そうやって答えたのである。『避妊の心配もないし・・』という言葉にも僕は傷つかなかった。それどころか逆にあっさりそんなふうにいう真知子の考え方に好感をもった。

何気ない会話の中に真知子の居酒屋仲間である今井という銀行支店長であったり、会社社長の横田という男の名前が出てくるようになった。もちろん、二人の娘の話も

よくでた。真知子の男関係を気にしていないと言えば嘘になるが、僕たちに変わりはなかった。またしても僕は時々、仕事帰り真知子のマンションに立ち寄り真知子の手料理を食べ、頭を切り替え、家に帰るとキッチンに立ち美帆のために食事の用意をするのだった。なんら変わりなく僕は真知子を抱き、そして真知子は悦んだ。

そしてまた僕たち夫婦の関係も、まったく変りがなかった。家事はほとんど僕が担っていたし、２ヶ月に一度は彼女を温泉旅行に連れて行き、子どもはいないが、家庭サービスをきちんとしていた。いや、子どもができないからこそそうしているのだ。子どもができないということは弱点であり遠慮であることは確かである。その遠慮が二人の距離を隔てたと思っているのは僕だけだったのかもしれない。真知子と愛し合うようになってからも美帆との性生活もほとんど変わりなかった。以前からたまに僕がさそっても美帆は疲れているから、お腹が痛いとかで断ってきていた。そして、美帆にはなぜか性的に解放できなかった。美帆の性的価値観と僕の性的価値観がちがっていたのだ。そもそもそのような性の話をする事さえ、僕たちはタブーだったのかもしれない。それは今の僕にとって都合のいい事なのだろうか・・・。単純にもし真知子がいなかったら・・・などと考えると真知子には失礼なことをしていると思いつつ、相変わらず自分の身勝手さを感じていた。自分がどうしたいのか・・・。できれば真知子と人生やりなおせたら・・・。そんなふうに考える日もあった。しかし真知子にも男がいる。真知子は男がいるにもかかわらず、どうして僕との関係を続けるのか、山なんて登れる男はどこにでもいくらもいるはずなのに。ということは、真知子はきっとその男を心底愛していないのかもしれない。いずれにしても僕と離れられない何かがあるにちがいない。真知子の言った「山とからだ」だけなのか・・・・。僕は真知子に翻弄していたが、真知子が僕に多くを求めないことをいい事に「大人の関係」ということでくくり自分の身勝手さをねじふせた。

## 7

真知子に会った時も、僕はごく普通に妻美帆とでかけた温泉の話をした。すると真知子はその温泉は何処にあるのか、どの道なのか詳しく僕から聞きだした。そんな真知子を見る度きっと男と行くにちがいない。今井という支店長か、横田という社長と行くのか・・・。虫のいい身勝手な僅かな嫉妬が僕の頭をかすめた。その男達はきっと経済的にも豊かなはずだ。僕と真知子は同い年、しかも同じ職業である。つまりほぼ給料は同じなのである。食事をしても僕たちは割り勘。僕は世間でいうケチな男な

のだ。真知子はそんな部分についても僕に何の期待もしていなかった。たまに僕の方から「ごめんね。割り勘で」と言うと「いいよ。対等な関係なんだし、他で元とるから・・・」などと冗談と本当の間の話しのように言った。そんな時、僕は心の中でこのしたたかな女、勝手にしろと叫びつつ、自分の財布もそして心も小さいのだと感じずにはいられなかった。

僕たちが出会って 3 年が経過し、あの忘年会の騒ぎ以来一度も喧嘩することはなかった。真知子よりは僕の方が思いをよせているのは間違いなかった。その頃になると僕は真知子から去ろうとは思わなくなりできるだけ真知子と一緒にいたいと思い始めていた。その事を真知子に言うと彼女は決まって

「何言っているの。だんだん年とって山も行かなくなって、おじいさんとおばあさんになったらもう私の事なんか相手にしないよ、きっと。」

そうやってあっさり言ってのけ、3 年前の忘年会の僕のとった行動をチクリと責めるのだった。真知子のいいところはそこだ。女性に多いしつこいタイプではない。確かに真知子はその忘年会の夜を境に変ったのは事実だ。真知子からは絶対に電話がかからない、あのつまらない、虹が綺麗だからといった事で高校生のように電話してきた頃の真知子ではなくなった。真知子はいつでも別れる覚悟をして男と付き合っているかのようにみえた。それは決して僕だけではない。支店長や、社長とどんな関係にしても真知子にとってはみな同じなのだろうか・・・。それとも 3 人揃って 1 人前なのかなーと思ったりもした。僕は様々なことを考えたが、真知子に問いただそうとしなかった。小心で受容能力の低い僕にとって聞かずにいることは、いままでにない画期的な変化だった。本来の僕はそんな不安定な関係に耐える能力がなく安全圏を生きてきた男だ。しかし今の僕は考えても、聞いてもどっちみち真知子とは離れられないのだ。極論を言えば、真知子が他の男と寝ても僕は離れられない。本当に体だけを愛しているんだろうか？いやそうでもない。しかし体が多くを占めていることは確かなような気がする。だが、そのことがとても悪いことのような気がしないのはなぜなのか。この年になって言うのもおかしいが体の相性みたいなのがぴったりなのは事実だ。それって、ひょっとしたらただのスケベということなのかと悩んだ日もあったが、そうじゃないんだ。なんだかとっても大切な気がしてならない。

真知子はかねてからの希望で転勤することになった。毎日顔が見れないのはほんの少し寂しいけれど、そのことで真知子が去っていくとも思えなかったが、転勤先によ

っては、遠方になり今までみたいに会えないかもしれない・・・。そんな単純な心配をしていた。

8

真知子に内示がでた。僕は驚いた。偶然にも真知子が転勤する場所は僕の父が一人住んでいる実家のすぐそばだった。なんという運命だ。僕は嬉しいような安心したような腐れ縁のような複雑な気持ちになった。真知子は現在住んでいるマンションを空き家にし引越しすることを決めたらしかった。妻美帆が寄り付こうとしないこの地に真知子は転勤と言えどもあっさりとやって来るというのである。

4 月になり真知子は僕になんの相談もなしに僕の手を煩わせることもなく引越しを済ませた。おそらく荷物運びを始めとする多くの力仕事は真知子の言う居酒屋仲間たちが手伝ってくれたにちがいない。昔の男が残した多額の借金の返済に追われる真知子に引越し費用はきっと社長や支店長が援助したのだ・・・・。僕はそんなことを思うと珍しく気が滅入った。仮に真知子に頼まれても僕は手伝えなかったかもしれない。しかし、一言の相談もなかったことがショックだったのだ。真知子は徹底的に僕との約束を守っていたのだ。僕に期待しないこと、二人の関係を秘密にすること。真知子のいうとおり「からだと山だけの関係」なんだとあらためて思うと 2 人の関係がとても薄っぺらく思え、自分が情けなくなった。何にもしてあげられない・・・。ひょっとして僕は真知子にとても悪いことしているのかもしれない。真知子は何も期待しないと言ったが僕が言わせたんだ。僕は僕だけのことを考えて、忘年会の夜一緒に帰ることをすっぽかし、真知子からの北アルプスの誘いを断りおまけに「棺おけまで持っていくんだよ」と念押ししたのだった。僕は実は小心なんかじゃないと気づいた。ただの自己中でケチで、ズルいスケベなオヤジなんだ。真知子が口癖のように言うのは無理もない。

「愛なんてないから、喧嘩しないよ・・・」

そう、僕たちは喧嘩も口論もない。あるわけがない。真知子は僕の事をどう思っているのだろうか・・・。聞けない。聞けばまたきっと言う。

「山と体だけの関係」

そんなふうに。

僕は真知子に寄り添うことも、別れることも両方できない男なのだ。世間でいうドラマや小説に出てくるような甘く切ない不倫とも違っている。真知子に何度聞いても

同じ答えが返ってくる。真知子への申し訳なさと自分のずるさと少しはあまえてくれたらいいのにという何とも言えないものたりなさとを抱きながら、引っ越したばかりの真知子に電話した。

9

真知子と僕は久しぶりに食事だけをした。意外にも新しいこの地が気に入ったらしく定年までこの地にいるかもわからないと調子のいいことを言っていた。相変わらず真知子らしかった。内心そうすればいいと思った。僕自身が本当は愛しているこの地に真知子が住み着くことが嬉しかった。マンションに住んでいた時のように尋ねていくことは無理があった。なぜなら真知子は平屋の官舎のような住宅に住んでいたからだ。周囲はみな真知子の今の学校の同僚なのである。真知子はその住宅に僕を寄せ付けなかった。一つだけほっとすることがあった。これで真知子の支店長も社長もここに寄り付くことがないかと思うと安心した。

真知子は新しい職場で人間関係に悩んでいたらしく、勢いよく僕にはきだしていた。こんなふうに聞いてあげる時間を大切にしてあげたかった。というよりこんなことしかしてあげられなかったのだ。真知子の悩みはさほど気にしていなかった。真知子には人間関係をうまく築く才能がある。くよくよ悩んでも長引くことはない。一時のことだ。3 年がたち僕は真知子をわかったような気になっていた。真知子の職場での人間関係の悩みは案の定、2 ヶ月もたたない間に解消し元気になって生きいきと仕事をしだした。ちゃっかり気の合う同僚を見つけ飲みにでかけたりしていた。実家に来たある晩、僕は真知子に電話をしたが、何度かけても電話はつながらなかった。きっと、また男と飲んでいるにちがいない。そう思った僕はあきらめて風呂に入って寝ようとした。しかし、真知子はもしかして、家に男を連れ込んでいるのかもしれないと思うと、いてもたってもいられなくなり、11 時半を回っているというのに、僕は車を出し真知子の家まで見に行くことにした。いったいどうしたというんだ。仮に真知子が男を連れ込んでいて、どうだというんだ。もし、そんな事が本当にあったなら僕はどうするんだろう・・・。そうだ、その時こそ別れたらいいんだ。別れられるんだ、チャンスじゃないか、別れてやる！・・・・。

真知子の住む家に着いた。真知子の車がない。いったい誰とどこに行ったんだ。ものの 10 分も経過しただろうか・・・。真知子は自分の車を運転して帰ってきた。ジーパンにTシャツ、長い髪の毛は一つに束ねて顔はほとんどスッピンだった。男と一

緒ではなかったとすぐにわかった。真知子は僕に気づいて近づいて来た。
「どうしたの？何かあったの？」
僕は何も言わず車から降りた。神経がたかぶって体が急に力が抜けフラフラになった。それを察知してか真知子は自分の口元に指をあてがい、「しーっ」という仕草をしながら彼女の部屋に僕を入れてくれた。それから僕たちはずっと内緒話で会話した。
会話の前に僕は黙って真知子を思い切り抱きしめた。
「どうしたっていうの？」
「どこに行っていた？」
「言ってなかったけれど私週に一度ボランティアに行っているのよ。」
「えつ？本当？こんなに遅くなるの？」
「そう、だって夜 11 時までなんだよ。電話相談受けてるの。」
「いつから？」
「そうーねー。もう 4 年になるかなー。」
僕は再びただ黙って真知子を力強く抱きしめた。今さっきまで男と飲み歩いているとばかり思っていた真知子は金にもならないボランティアに時間を費やしている。こんな一面が真知子にあったのだと思う驚きと真知子に対して失礼な事を思ったことを恥じ、わびたい気持ちでいっぱいになったがとうとう口には出せなかった。この隣には真知子の同僚の若い教師が住んでいるとわかっていながら僕たちはその夜も愛し合った。
「どうしちゃったの？こんな夜中に・・」
あらためて僕の耳元で真知子は聞いてきた。
「心配になったんだ。」
「何を？」
「君が他の男とここにいたらどうしようって・・・」
「へぇー、めずらしくヤキモチやいてんの？」
「・・・・・」
「ヤイテどうすんのさ。だいたいヤキモチやく資格も権利もないはずよ」
「そうだった・・・」
「男の友達のことは言われたくないよ。だって私は彼らにずいぶん助けられているっていうか、癒されているっていうか・・・」

「わかるよ、なんとなく言いたいことは・・・・」
「よかったのよ、最初にあなたに大きい釘をさされているから。私は今までの恋愛みたいにつまずかないよ。絶対惚れ込まない、期待しない、甘えない。だけど、こうやってあった次の日はたまらなく愛しくなるのは事実だよ。でも安心して、揺ぎ無いあなたの家庭を壊そうなんて思っていないから・・・。」
そうなんだ、僕が思ったとおり真知子は僕なんかよりずっと覚悟して生きているのだ。つまり覚悟は別れる覚悟でもある。真知子の全身から「いつでも別れるよ」というメッセージがなおさら離れられなくなるのだ。僕は話を変えた
「なんで、ボランティアしてるの?」
「いままで、たくさん悪いことしてきたから罪滅ぼししているの。よその旦那と昔も今もこんなことしているから、どこかで神様に許してもらおうってこんたんなの。」
「そんなこと言わないで。だったら僕もしないと・・・・。」
「そうよ。当たり前じゃないの。」
真知子と僕は静かに笑った。
真知子の転勤で僕は、かえって離れられなくなった。毎日顔が見れない分たまに会うと若い恋人のように新鮮だった。いい年をして滑稽だけれど僕はまだまだ真知子と離れられない。妻美帆には不誠実で、真知子にはズルイ男のまま今も生きている。